

番外能《鈴木》とその復曲

小林 健二・鈴木 啓吾

はじめに

能《鈴木》（鱸・語鈴木・繩鈴木・重家）など多くの異名を持つは、今日では演じられることのない番外曲の一つであるが、大永四年（一五二四）成立の『能本作者註文』や、永正十三年（一五一六）の奥書がある『自家伝抄』、室町末期成立とされる『いろは作者註文』など能の作者付け資料に曲名が載ることから、室町期にあったことは確かな作品である。また、その作者について『能本作者注文』は「作者不分明能」とし、『自家伝抄』では「世阿弥」の項に掲げられるが、成立時期や作風から世阿弥作とは信じられず、今のところ不明としか言いようがない。

本曲の主人公（シテ）は曲名にもなっている鈴木三郎重家である。重家は、弟の亀井六郎重清とともに源義経の股肱の臣であった。ことに衣川の高館で義経と最期をともにした忠臣として名を残している。と言うより、この高館合戦の場面ではじめて脚光をあびる人物なのである。その活躍は、源義経の一代を綴った『義経記』の巻八や、語

り物芸能である幸若舞曲の「高館」で知られるが、能の《鈴木》で取り上げられる題材は、彼の高館合戦での奮戦ぶりや最期に関わる話ではなく、『義経記』や幸若舞曲には見られない外伝とも呼ぶべき鈴木三郎重家譚である。

ここでは、番外能《鈴木》を紹介し、それが中世の語り物の中で形成された鈴木三郎重家譚を題材として成立したことから、近世において他の文芸に少なからず影響をあたえたことを述べ、さらに現代に《鈴木三郎重家》として復活した経緯について報告を行いたい。

番外能《鈴木》の構成と内容

まず、能《鈴木》がどんな内容であるかを見ておこう。配役は、シテが「鈴木三郎重家」、前ツレが「重家の母」、アイは「梶原の家来二人」、ワキは「源頼朝」、ワキツレとして「頼朝の家臣」が登場する。次に段ごとに筋を追っていきこう。

(一) シテの登場。鈴木三郎重家(シテ)が登場し、主君の義経が頼朝に攻められると熊野道者より聞いたので奥州に馳せ参じることを述べる。

(二) シテとツレの問答。重家は母(ツレ)の病を気遣いながら、奥州下向の意志を母に伝えるが母は引き留める。重家は、異国にも老いた母を振り捨てて戦場に向かった勇者の話があり、本朝では奥州の佐藤次信が母を残して西国に赴き、戦死して名をあげたことを説いて許しを乞う。それを聞いた母も涙ながらに行くことを許す。ここで〈中人〉となる。

(三) アイの登場と問答。梶原の家来二人が登場し、奥州に下向する途中の重家を捕らえたので頼朝に報告することを述べる。

- (四) アイの報告。ワキとワキツレの問答。梶原の家来が頼朝の家臣(ワキツレ)に重家を捕らえたことを報告する。家臣は頼朝(ワキ)に知らせ、頼朝は自分の前に連れてくるように命じ、梶原の家来が重家を引き出す。
- (五) ワキとシテの問答。頼朝は、重家に思い残すことがあれば目前で述べよと迫る。重家は、奥州に向かう途中に捕らわれたことの無念を語り、首をはねよと訴える。義経が土佐正尊を討ったことを頼朝が責めると、重家は、平宗盛を鎌倉に護送した際に義経を腰越から追い返したことの頼朝の非を説き、さらに討つ手として一門の者ではなく土佐正尊を遣したことの不覚を申し述べる。
- (六) ワキとシテの問答。さらに頼朝は、摂津渡辺における梶原景時の逆櫓の意見を義経が聞き入れなかったことを責めると、重家は、義経が自分の舟には逃走用の備えとなる逆櫓の無用を述べたことの正当性を述べ、梶原が義経を猪武者と畜類に例えた非道を説く。他の者からはそのような報告は受けてないと頼朝が言うのと、それは皆が梶原を畏れて言わなかっただけで、梶原に同心する頼朝の運も末だと、重家は涙を流して訴える。それを聞いた大名達は重家を褒め讃え、頼朝や周りの者も感涙を流す。
- (七) ワキとワキツレの問答。頼朝は重家の縄を解くことを命じ、縄を解かれた重家は烏帽子直垂の姿で御前へ召される。(物着)
- (八) アイの語り。梶原の家来が、重家の立派な態度に感心して頼朝がその命を助けた旨を語る。
- (九) シテの舞。御前に参った重家は、頼朝から杯をいただき、所望されて「男舞」を舞う。
- (十) 結末。シテの奥州下向。頼朝は、先のない義経を頼みにするよりも自分に仕えれば恩賞は願いの儘であることを述べ、重家も領掌したふりをするが、義経との主従の情には変えられないと奥州に下っていく。
- 右のように全十段からなる。前場は、老いた母を残して戦場に赴く重家の心情と、別れ難く思いながらもそれを許す母との心の交流が描かれる。後場は一転して、捕縛された重家が頼朝と対面し、論難のうでかえって賞賛を

得て、乞われるままに勇壮な男舞を見せるという能で、種別としては《盛久》などと同じく男舞物の一つに分類される。

演能記録としては、永禄四年（一五六二）閏三月一日に、雄高山会所で毛利元就の酒宴の折、近江大夫が「鈴木」を演じたのが初出となる。また、『言継卿記』の永禄十一年（一五六八）正月廿六日に西岡下津林神事猿楽で八田大夫が「鱸」を演じているが、それより前に、同じく『言継卿記』の天文二十三年（一五五四）に、言継が大和宮内大輔と「すゞき」の音曲本の貸し借りをしている記事がみられることから、十六世紀の前半には、能《鈴木》は成立していたことがえよう。

また、謡本も室町期にさかのぼるものなど数種が存し、室町後期頃成立の金春系装束付けである『舞芸六輪次第』をはじめとして、江戸初期頃の陽明文庫蔵『冊子改装卷子本装束付』や慶長十六年（一六一一）奥書の福王流『盛勝本衣裳付』など演出関係資料が数種残っていることや、間狂言について記された神宮文庫蔵『能間・作物作法』に記事があり、大蔵流・和泉流ともに間狂言詞章が残っていること、また、江戸初期の『幸正能口伝書』にも囃子に関する記事が見えることから、室町時代から江戸時代を通じて上演されていたことが知られる。

このように《鈴木》は室町期には成立していた能なのであるが、その素材となった鈴木三郎重家譚はどのように形成されたのであろうか。次ぎにそのことを見ていきたい。

題材である鈴木三郎譚の生成

鈴木三郎重家という人物は、『平家物語』の諸本中では、義経の郎等として一、二箇所にも名前があらただけで、さしたる活躍が記される者ではない。たとえば、一ノ谷の合戦に先立つ三草山の勢揃いにおいて、『源平盛衰記』巻第三

十六「源氏勢汰」では、義経軍の手郎等として「鈴木三郎重家」の名が弟の「亀井六郎重清」と並んで出ており、『四部合戦状本』には「鱸三郎」と見え、『百二十句本』にも名前が記されるが、その他の諸本には見られないのである。

また、土佐正尊が堀河御所を夜討にする場面では、『百二十句本』で弟の亀井六郎とともに見え、『南都本』では「須々木三郎」、「中院本」で「鈴木三郎」の名前だけが見られる。つまり『平家物語』ではその程度の扱いなのである。さらに、『吾妻鑑』では、弟の亀井六郎の名が、文治元年（一一八五）五月七日の条に、義経に異心なしの起請文を京より鎌倉へ伝達する使者として出てくるのみで、鈴木三郎重家の名前はまったく出てこない。

このように『平家物語』では目立たない存在だった鈴木的人物像は、義経と運命をともにした家来の一人として、伊勢三郎や駿河二郎などとともに、『義経記』や幸若舞曲などの物語・語り物の世界で劇的に増幅してゆく。そのハイレイトといえるのが幸若舞曲「高館」において、義経の最期に間に合うように奥州衣川に駆け付け、弟の亀井六郎重清とともに華々しく戦い、そして雄々しく死んで行くという鈴木三郎重家像である。

そんな重家に人々は共感し、大いに興味を引きつけられたことであろう。そこで、紀州藤白に居た重家が義経の危機を知って、その最期をともにすべく奥州高館へと駆けつける動向に、独自のエピソードが添加されるようになったと推測される。

大方家本「高館」は天正十一年（一五八三）の奥書を有する、幸若舞曲「高館」諸本の中では現存最古の写本で、語り物の要素を種々残しているテキストであるが、そこに他の正本には見られない独自異文として、合戦の直前に鈴木・亀井の兄弟と弁慶らが大手の櫓の上で酒盛りをするという挿話があり、その中で重家は次のように自らのことを語る。

あふ情なしとよ武蔵殿。かゝる事を申せば、奉公だてにはにたれども、今申さでいつの時申べき。たゞのお吉

野山にて君のふせぎ矢をつかまつりし時、さとうを見つぐ人もなし。すゞきともにとゞまり、君のふせぎ矢をつかまつり、吉野山をばしのびいで、きのちをさして落て行。きの国げんじのこわうして、又ふぢしろにをちてゆき、田辺の浦より船にのり、伊勢のとばへ落てゆく。伊賀より打手むかふぞと、みやこよりもしらすれば、又ふぢしろにおちてゆき、人目をつゝみて候いしが、君も又、ひの本のせいしやうぐんとあをがれますと、遠近人のしらすれば、君をもおがみたてまつり、傍輩たちもこいしくて、七十にあまる母のあま、久しくなじむふうふのわかれ、十一九ツ六ツになるわかどもをふりすて、七十五日にまかりつき、あけなばうち死つかまつらん、このしげいゑに、盃をなかはたばであるべきこそ。⁽²⁾

右のように、〈吉野山で義経を無事に落とすべく忠信とともに防ぎ矢をし、伊勢から紀伊藤白に落ちていたものの、義経を慕い、仲間達もなつかしくて、七十余歳の母や妻子と別れて高館までやって来た〉という、他の「高館」諸本には見られない鈴木三郎外伝とも言うべき内容が語られるのである。とくに老母との別離を語るところは、能《鈴木》の前場と通じよう。

このように、鈴木が奥州平泉に下るまでの途次の出来事が、享受者の興味のおもむくままにいろいろと増幅して語られていったことが想像され、その中で重家が高館にたどり着くまでのエピソードとして、〈旅の途次に鎌倉で梶原に捕らえられて、頼朝の前に引き出され、義経のことであるいろいろと論難を仕掛けられるが、それを見事に論破して、かえって頼朝の感心を得て、恩賞とともに頼朝の臣下になることを迫られる。しかし、鈴木はそれに靡かず、ひたすら義経の元に駆け付ける〉という話が付加されていったと考えられよう。そしてその話が能《鈴木》へと劇化していったと考えられるのである。

ところで、この能《鈴木》の題材となった鈴木三郎重家譚が生まれる契機としては、『義経記』巻八の〈所領安堵の話〉が関係すると思われる。『義経記』（田中本）巻第八「鈴木三郎重家高館へ参る事」には次のような義経と重家

の対話の記事がある。

鈴木三郎を召して、「抑々和殿は、鎌倉殿より御恩蒙りたると聞きつるに、いかに世になき義経がもとに程なくかかる事の出で来るこそ悲しけれ」と仰せられければ、鈴木三郎申しけるは、「鎌倉殿より紀伊の国に保郷一所賜りて候ひしが、然るべくはかからん為にてや候ひつらん。寝ても醒めても君の御事を片時も忘れ参らせず。御面影眼にすがりて余り参りたく候ひつる間、年頃の妻子をも熊野の者にて候ひしを送り候ひぬ。今は今生に思ひ置く事候はず。」³⁾

右の傍線部のように、義経は奥州に下ってきた鈴木に対して、「鎌倉の頼朝から御恩をこうむったと聞いているが」とたずね、鈴木も「頼朝から紀伊の国に所領を賜った」ことを答える。この頼朝より所領を賜ったという話が、どのような経緯があつて受領したのかと推測され、能《鈴木》のような話へと成長していった、と考えられよう。

このような『義経記』の断片的な記事から、鈴木三郎重家譚は成長していったことが考えられるが、その形成にはもう一つ重要な要因があつた。すなわち、その生成に、〈頼朝が敵対して捕縛された者を尋問するが真つちに反論され、それに感銘して所領を安堵する〉という、語り物のなかに見られる寛大で鷹揚な頼朝像が認められるのである。

たとえば、曾我兄弟の敵討ちを扱った幸若舞曲「十番斬」では、仇討ちの後に捕らえられた五郎時宗に対して、公の狩り場で仇討ちをしたこと、頼朝の郎等を殺したことを咎められるが、時宗は臆せず自分の存念を堂々と述べ、頼朝は感銘して「今より後は頼朝に忠臣たるべし。本領なれば、宇佐美・楠美・河津・三ヶの庄、永代安堵の状、かくのごとく、源の頼朝」と、自ら所領安堵の状を書いて讃える。しかし、時宗は兄の十郎祐成が生きていればともかくも今となつては無益と、自ら望んで死んでいく。また、幸若舞曲「景清」では、頼朝は千手観音が身代わりとなつて生き仏となつた景清と対面し、三十七度も自分の命を狙つた景清に対して、「頼朝が代にも二万町、合わせ

て四万町宛て行ふ。今より後は、悪心を翻し、頼朝に仕へ候へ」と、もとの二万町にさらに二万町を添えて安堵する。また、幸若舞曲「静」では、鶴ヶ岡八幡宮でみごとな舞を見せて義経への思慕をうたった静御前に、駿河国神原八十町を与えている。

このような（頼朝が捕縛した自分に敵対する者を尋問するものの、かえってその働きに感嘆し、自分の家臣になることを望み所領を安堵する）というパターンは、頼朝物の中に散見されるモチーフで、その話形が鈴木三郎重家譚にも取り入れられて、この物語が形成されたと考えられよう。すなわち、この物語は、天下人として寛大で鷹揚な態度をとる頼朝像が増幅するのと相俟って、語り物の世界で作り上げられていく過程がうかがえるのである。

この鈴木三郎重家譚を形成した基盤は、紀州藤白であろう。すでに『義経記』巻八の形成に熊野修験の徒がからんでいることが、角川源義氏などにより説かれているが、紀州藤白を出発して、一度鎌倉で捕縛されるものの難を逃れ、奥州高館へといたるこの重家のエピソードのルートは、熊野信仰が伝播した道筋と重なり、鈴木氏の基盤である紀州藤白の地で形成されたと考えるのが自然であろう。藤白神社には鈴木系図が残され、その重家の項に《鈴木》とはほぼ同内容の記事が載せられるが、それは熊野で発生し、増幅していった説話の一つであると考えられるのである。

近世芸能における能《鈴木》の摂取

《鈴木》は江戸時代の半ばには廃曲扱いとなっていたが、その内容は人々の興味を引いたようで、近世文芸において広く享受され、種々のかたちで新しい展開を見せた。

例えば、元禄二年出雲寺和泉掾刊の三百番の外百番、いわゆる四百番本に収められている《追懸鈴木》という番

外曲がある。シテが鈴木三郎、ワキが大間経正、立衆として大間経正の家来が二、三人という配役のごく短い曲である。内容は、〈奥州へ向かう鈴木三郎重家が、武蔵野を通りかかった時に、梶原景時に仕える大間経正に見とめられ、大勢の手下によってからめ取られ、鎌倉に連行される〉といった筋立てで、一見して、能《鈴木》の前場と後場を繋ぐものの、すなわち第二段と第三段の間に入るものとして作られたと推量される。成立時期は江戸時代の前期ころで、以後、元禄・宝永期の稀曲ブームに乗って数回上演されたが、その後は廃曲扱いとなったようだ。

能だけでなく、『生捕鈴木』という狂言もある。この曲は、版本『絵入狂言記』（万治・寛文刊）のみに所収される曲目で、挿絵を見ると舞台に向かって右のワキ座の辺りに烏帽子を乗せた葛桶が置かれており、これが頼朝を示すようで、中央には袴姿の役者が扇を持って語っている様子が描かれる。狂言役者が一人で、鈴木三郎・梶原景時・源頼朝の三役を語り分けた模様である。「廃曲の能「鈴木」の間語りか」とする説もあるが、内容が能の後半とほとんど変わらないことと、また挿絵の図柄からも能《鈴木》の間狂言として作られたものではなく、純粹な語り芸として演じられていた曲と推測される。

内容は、重家が捕らわれた後に、頼朝の前で「土佐正尊を討ったこと」についてを尋問され、重家が堂々と反論する、すなわち、能《鈴木》の第四段によりながら、狂言の語りとして仕立てられたと言えるが、重家を捕らえたことを聞いた頼朝が、「鈴木」を魚の「鱸」と勘違いしたり、重家に反論されて窮するあまりに毛抜で髭をぬくなどしてその場を取り繕っている様子などが語られ、頼朝が滑稽な役回りとなっている。鈴木三郎重家譚は、頼朝が敵対する者に対する寛容さと、天下人としての鷹揚さを持った人物として造型されるパターンにはまって形成されたことを述べたが、ここでは天下人としての影は薄れ、道化役となった頼朝の姿が見えるのであり、そこに狂言語りの面白さが窺えるのである。

古浄瑠璃にも《鈴木》の影響は見られる。土佐浄瑠璃『義経記』七之巻は、題簽に「義経記七日／義経最期／太

夫土佐少掾正本／大伝馬三町目△屋／新板」とあり、刊記に「右此本者世間ニ雖有数多殊之外落／字誤有之故今又
大夫直伝之以正本写之／令板行者也 元禄二己巳年正月吉日 大伝馬三町目／うろこかたや／新板」とあることか
ら、その素性や刊行年次が明らかな正本である。⁷⁾

この七之巻は六段で構成され、標題のごとく義経の最期を描いた巻である。内容は、『義経記』ではなく、基本的
には幸若舞曲の「高館」「含状」から構想されているが、初段は幸若舞曲には見られない重家の話からなっており、
能の《鈴木》や《追懸鈴木》を参照して作られたことが推測される。

ともあれ、江戸初期において古浄瑠璃作者が義経の長編戯曲を作る際に、能《鈴木》を取り入れて作っているこ
とがうかがえるのであり、作者の取材範囲を考える上で注意すべきであろう。《鈴木》は江戸初期より上演されるケ
ースが少なくなるので、早い時期に《鈴木》と接して、それを取り入れたことも考えられる。当然、文句の類似性
からは謡本も入手していたと思われ、古浄瑠璃作者と能役者との交流なども考えられるのである。

また、中央の芸能から地方に視点を移すと、東北地方の山間に伝承した山伏神楽・番楽に「鈴木」という演目が
見られる。それは番楽の型に謡曲の詞章を取り入れて作られており、番外曲《鈴木》は、東北地方の山間の芸能に
まで影響を与えていることが知られるのである。

復曲能《鈴木三郎重家》の制作と上演

能《鈴木》は、『古之御能組』によると明暦元年（一六五五）六月五日に《縄鈴木》の曲名で喜多流の高井平右衛門
が演じた記録が見られることから、江戸時代前期までは稀に上演されていたが、その後、次第に上演曲目から遠ざ
かったようである。

その番外曲に注目して復曲を考えたのが、観世流能楽師の鈴木啓吾である。その復曲に至った経緯は、復曲上演のパンフレットの「復曲能『鈴木三郎重家』、そして藤白鈴木屋敷復元への思い」に尽くされているので、それを用しよう。

本日ここに復曲・上演させていただきます『鈴木三郎重家』は、原題を『鈴木』『語鈴木』『重家』など、いくつかの呼び方がありましたが、室町時代後期頃に作られ、江戸時代初期頃まで上演されていた曲でございます。私はこの曲の存在を、『謡曲全集』（國民文庫刊 明治四十四年）で知ってはおりましたが、鈴木三郎重家という人物、また、鈴木家のルーツということを一昨年藤白神社を訪れるまで全く知りませんでした。

子どもの頃から身の回りによくある苗字でしたので、この「鈴木」という名前に私自身特別な思いを持っておりませんでした。むしろ、ありふれた名前ゆえに、もつと個性的な、珍しい名前だったら良かったのになあ……などと思ったりもしました。ところが神社を訪れ、鈴木家のルーツを知り、三郎重家・六郎重清兄弟の事績を知って、私の中に俄かに「鈴木」という名前に対する誇らしい思いが湧いてきたのです。

鈴木三郎重家という人物を知って、改めてこの廃曲となっている『語鈴木』の本文を読み返してみると、とても良く作られた作品でした。折しも藤白の鈴木屋敷を復元・再生しようと、神社・保存会・鈴木会の皆さま方が尽力されていらつしやる……。能楽の世界に身を置く鈴木として、何かお役に立てることがあるとすれば、この曲を復曲して多くの方々に観ていただき、三郎重家と鈴木屋敷のことを知ってもらうことではないかと思ひ、今回の復曲能の上演と相成りました。

親子は一世、夫婦は二世、主従は三世の契り……と言いますが、形勢不利と見るや平気で主君を変えてしまう武士は昔から多かったようです。武士の世の中だからこそ、「武士の鑑」の能として、現在でも現行曲として上

演されている『鉢木』や、或いは廃曲となったこの『語鈴木』は、主君に対する篤い忠義の物語として大きな意義のある曲であったのだと思います。その後『語鈴木』が上演されなくなったのには、例えば主君義経の爲であつても、源氏の棟梁・幕府の將軍である源頼朝を騙して良しとするのは如何なものか…と、徳川將軍家がそう考えたからなのか、その理由は判りませんが、江戸時代初期の上演記録を最後に現行曲から消えてしまいました。

源義経の家臣でありながら、鈴木三郎重家と亀井六郎重清の兄弟が世間的に有名でないのは、『平家物語』や『源平盛衰記』の中にその名前やエピソードが入れられていない事がその大きな要因ではないかと思われまふ。多くの方のお力添えを頂いて、凡そ三〇〇年の時を経て蘇る『鈴木三郎重家』の能。この能を通して重家や重清の存在を未だ知らない全国の鈴木さんに伝えたい、そして藤白神社・鈴木屋敷のことを一人でも多くの鈴木さんに知っていただきたい、そんな思いで本日の舞台を真摯に勤めて参りたいと思います。

右のように、鈴木氏のルーツである重家への思いと、鈴木屋敷復興に役立ちたいとの思いから、鈴木三郎重家を主人公とした『鈴木』の復曲を思いつき、平成二十八年三月二十九日に『鈴木三郎重家』という曲名で復曲上演をしたのである。復曲の作業についても「パンフレット」に述べているので、これも引用しよう。

今回の復曲にあたって、本文は『版本番外謡曲集』（伊藤正義編、臨川書店）を底本とし、また『謡曲全集』（國民文庫）、『謡曲叢書』（芳賀矢一・佐佐木信綱校注、博文館）を参照し、国文学研究資料館副館長の小林健二先生に監修いただきました。上演台本としました。間狂言の本文は『狂言集成』（野々村戒三・安藤常太郎著、能楽書林）を底本とし、野村萬斎先生に監修・演出をお願いしました。また、囃子の手組み等を松田弘之・大倉

源次郎・亀井広忠の三先生に作調していただきました。節付け・地拍子・型付け・装束につきましては、觀世喜之先生はじめ、今回お力添えくださいましたシテ方・ワキ方の諸先生からの助言・提案をいただきながら最終的な形が出来上がりました。

つまり、復曲台本は版本の四百番本を軸にして上演にふさわしいカタチに調整を行い、間狂言は『狂言集成』に所収される詞章をもとに作られた。次に上演台本の詞章を全十段の構成に則してあげよう。

鈴木三郎重家

(一) 名宣・シテ／かやうに候者ハ。判官殿の御内に鈴木三郎重家にて候。さても判官殿ハ。頼朝と御仲違はせ給ひ。奥秀衡を頼み御ひらき候。某も御供申すべく候を。老母の候が以ての外に痛はり候程に。弟にて候亀井の六郎を御供させ。某ハ此の間当国紀州藤白に候。又奥より熊野へ参る道者の申し候ハ。頼朝より猛勢をもつて攻め申さるべき由聞こえ候と申し候程に。急ぎ罷り下り御一大事をも見届け申さばやと存じ候。さる間此の由を母にて候者に委しく申さばやと存じ候。」

(二) 重家が参りて候 ツレ／なに重家とや。近う渡り候へ シテ／畏つて候。」いかに申し候。此の程御心地ハいか様に御座候ぞ ツレ／さん候風の心地ハ。昨日より少し心も良く候程に。御心易く思ひ候へ シテ／何と良く御座候と仰せられ候か。かゝる祝着なる事こそ候はね。さてハ心安く存じ候。又たゞ今奥より熊野へ参る道者の申し候ハ。我が君高館に御座候を。近日頼朝より攻め申さるべき由申し候程に。急ぎ罷り下り御一大事をも見届け申すべし。たゞ今ハ御暇乞ひの為に参りて候

ツレ／判官殿にハよき兵数多つきそひ申したり。その上亀井の六郎ハ。御身の代官に君の御供申したり。明日

をも知らぬ母が命。いかでか見捨て給ふべき シテ仰せハさる事にて候へども。老たる母を振り捨て戦場に出でし例の候。先づ天竺にハ舍衛国の官人。老たる母を振り捨て摩伽陀国に向ひしなり カ、ル・ツレさて大國にハ誰が有りしぞ シテ高祖の武士はんかいハ。母の衣を着かへつゝ。鴻門に向ひし今迄も。母衣とハ母の衣なり カ、ル・ツレさて我が朝の譬へにも。さやうの事のありしよなう シテ遠からず奥州の佐藤継信ハ。母を故郷にとゞめ置き。西国の御供申しゝなり カ、ル・ツレげに此の上ハまのあたり シテ見聞し事のツレ身の上に 上歌・地奥州の。果てより遠き西の海。果てより遠き西の海。八島に寄する浦波の。討ち死にしてこそ継信ハ。その名をあげし武士の。やたけ心にも。浮かむや涙なるらん。今を親子の契りの限りぞと思ひ重家ハ。行くべき方をだに思ひ辨へぬ心かな クセ母ハその時重家に。御身の弟の。亀井の六郎に。言伝すべしかりそめに。別れし後ハ黒髪。あからさまに思ひしに。言はむ方なや思ひやれ。心ハ空にみちのくの。千賀の塩竈近からば。などや見もし見えざらんと。思ひかね浜千鳥。音をのみ鳴くと語るべし シテ暇申してさらばとて 地行くハ慰む方もあり。とまるぞ名残簪木の。有りと見えつる思ひ子の。行く跡も遠くなり果てゝ。立ち別るゝぞ哀れる立ち別るゝぞあはれる 中入

(二三)

オモ「取つたぞ 取つたぞ アド「何事ぢや 何事ぢや オモ「取つたぞ 取つたぞ アド「何事ぢや 何事ぢや オモ「取つたぞ 取つたぞ アド「何を取つた オモ「すゞきを取つた アド「それは良い物を取つたな オモ「これは良い物ぢや程に。其方へ申さう。虫もの事に料理を好ましめ アド「それならば何が良からうぞ。いや。作りすまして膾が良からう オモ「それも良からう。身共が思ふハ。煎り酒を掛けては何とあらう アド「煎り酒 オモ「中々 アド「これは一段と良からう オモ「やい。魚の鱸ではない。鈴木 of 三郎重家を生け捕つたと云う事ぢや アド「なに重家の事ぢや オモ「中々 アド「それは手柄な事ぢや オモ「此の由申し上げう アド「誠に申し上げずばなるまい。急ぎ申し上げさしめ オモ「そちは功者役に申し上げたが

よい アド「はて功者が入る事か オモ「其方が承りぢや 二人」どうでもさあさあ アド「身共は知らん
オモ「はあ。これはいかな事。是は何としやうぞ。是非に及ばぬ 申し上げう。身共が申し上げう程に。そ
なたハ鈴木を連れて来さしめ

アド「心得た

(四)

オモ「如何に申し候 ワキツレ「何事ぞ オモ「鈴木 of 三郎を梶原が手に生捕りて候。何と仕らうずるぞと御披露
あつて給はり候へ ワキツレ「心得である。」如何に申し上げ候。梶原が手へ鈴木三郎重家を生捕つて候が。何
と仕らうずるぞと申し候

ワキ「此方へ連れて来たり候へ ワキツレ「畏つて候。」急いで御前へ引かせて参れとの上意であるぞ オモ「畏
つて候 アド「さあさあ行けゆけ。さあさあ行けゆけ。さあさあ行けゆけ オモ「御前近く候間。先づ笠を取
り候へ」アド「さあさあ行けゆけ」オモ「先づ下に居さしめ」

(五)

ワキ「鈴木 of 三郎重家とハ汝が事か。さても判官頼朝に野心あるにより。己さへ天の網にかゝり生捕られたる
なり。何事にてと思ひ置く事あらば真つ直ぐに申し候へ シテ「仰せ畏つて承り候。先づ某ハ我が君判官殿
に。片時も離れ申さず候を。老母を持ちて候が。以ての外いたはり候程に御暇を申し此の間ハ本国紀州に候
処に。奥より熊野へ参る道者の申し候ハ。頼朝より猛勢をもつて我が君を攻め申さるべき由申し候程に。夜
を日になし罷り下り候処に。運の尽くる処ハ。路次にてやみやみと生捕られ。御前に召し出だされ首を刎ね
られん事。弓箭取つての面目かと存じ候程に。何事にて候へ思ひ置くことハなく候。ワキ「さても義経が野
心の事。もしも思ひや直すと存ぜし処に。土佐正尊を討ちし事ハなんばう不思議の事ぞ。 シテ「何と我が君
の御野心と候や。先づ御心を鎮めて聞こし召され候へ。我が君判官殿ハ。頼朝の御代官として。鬼神よりも
手強かりし平家を平らげ。あまつさえ大将宗盛を生捕り御下向候処に。召人をば召され。判官殿をば腰越よ

り追ひ返し申されし事ハ候。その時亀井・片岡・武蔵坊と云ふ大ぶれ者。かう申す重家を始めとして。いざ鎌倉に乱れ入つて。讒言の口ためさんと申し、を。判官殿親兄の礼を重んじ給ひ。引き具し都に帰り給ひし事。やはか御野心にては候。それに正しき御兄弟を亡し申さるゝとも。御一門にはたを相そへ。そのほか名ある侍に仰せつけらるべきに。さもなくして誰か知らぬ。あの土佐めハ金王丸と云ひしわつば。一旦御意のよきまゝに。御前の交ひ赦されたるにてこそ候へ。我が君判官殿の。討手の大将承り都に上り カ、ル 狙ひ申し、天罰を 上歌・地 蒙りたるハ頼朝の。悪名ハ忽ちに。御僻事と夕顔の。源氏を討手の大将にハ。不足なりと京童。笑ひしハ唯。君の御不覚なりと申すなり

(六)

ワキ いかに鈴木。何とて義経ハ渡辺にて。梶原が逆櫓の意見をば嫌ひけるぞ

シテ さて御前にてハ何と申し上げて候ぞ ワキ 梶原これにて申し、ハ。平家ハ運の末になると雖も。未だ宗徒の武士西国に数多あり。然らば船戦ハ訓練しつらん。味方にもその手だてなくてハ適ふまじ。舟に逆櫓と云ふ物を立てゝ。馬の駈け引きの様にこそ申しつれ シテ げにさやうにて候。又我が君の仰せにハ。それ戦場に出づる時ハ。我人一所とこそ思へども。その際になれば不思議にさハなきものなり。逆櫓ハ偏へに逃げ設けなり。世の人の舟にハ逆櫓をも立てよ。義経が舟にハ逃げ設けハ無益と仰せありしハ。やはか御僻事にてハ候。それに正しき一家の御主を。畜類に譬へたる梶原めハ。なんぼう存外なる者にて候ぞ ワキ いやさやうに悪口しけるとハ。皆人々も申さざりしよ シテ げにげに時の権に恐れて。申さぬハ理。やはかあらがひ給ふ。正しく判官殿を猪武者なんど。かやうに悪口申し置き。身の置き所のなきまゝに。とがなき義経に讒奏申し付くる梶原めに。御同心ある頼朝の。あつばれ御運も末にやならせ給ひ候らん。や。かやうの申し事。恐れ多く候へども カ、ル 重家が身ハとてもかくても苦しからず 上歌・地 唯返す返す頼朝の。不覚なりつる御振舞ひ。あらもどかしの御心やとて。さめざめと泣きければ。御前に。ありける諸大名。剛

なる重家かなとて。ほめぬ人ハなかりけり。君もあはれと思し召し。狩衣の袖を御顔に。押し当て給へば。人々も。皆感涙を流しけり。皆感涙をぞ流しける

(七) ワキ／いかに誰かある　ワキツレ／御前に候　ワキ／重家を傍へ引かせ候へ　ワキツレ／畏つて候」いかに誰かある　オモ／御前に候　ワキツレ／鈴木を傍へ引きのけ候へ

オモ／畏つて候。さあさあ立ちませい　アド／立ちませい」ワキ／あまりに彼の者大剛の者にてある間。縄を赦し召しつかはうずるにてあるぞ。その由申し付け候へ　ワキツレ／畏つて候。」いかに鈴木殿に申し候

シテ／何事にて候ぞ　ワキツレ／君よりの御誕にて候。あまりに大剛の人にて渡り候程に。縄をゆるびて召しつかはれうずると仰せ出だされて候。さて何とあるべきぞ　シテ／まづ畏つたると御申し上げ候へ。　ワキツレ／

心得申し候。」いかに申し上げ候。上意の通り重家に申し聞かせて候へば。畏つたる由申し候　ワキ／さらば

烏帽子直垂にて。急いで此方へ来たれと申し候へ　ワキツレ／畏つて候」いかに重家に申し候。急いで烏帽子直垂にて。御前に御参りあれとの御事にて候　シテ／畏つて候　〔物着〕

(八) オモ「さてもさても推参な者ぢや。たゞいま君より縄をゆるびて召しつかはれうとの仰せに。まづ畏つたと申して候が。まづとは何とあらうぞ、さりながらあのつれな者ぢやによつて。命を助かられた事ぢや」「いかに鈴木三郎へ申し候。烏帽子直垂を召されたならば。急ぎ御前へ御出であれとの御事にて候

サシ・地／げに理も重家が。いましめを解き許し。急ぎ御前に召されつゝ。君より下る御盃。取り伝へたる梓弓　一セイ・シテ／遙々旅の憂き思ひを。　地／忘るゝ今の。酒宴かな　ワキ／いかに重家。一道の達者ハ萬事に

渡ると云へり。舞まはぬ事ハあるまじ一さし舞ひ候へ　一セイ・シテ／遙々旅の憂き思ひを。　地／忘るゝ今の。酒宴かな　〔男舞〕

(十) ノル・地／君ハ打ち解け重家に。君ハ打ち解け重家に。情を感じし思し召し。由なき義経を頼まんよりハ。頼朝

に仕へよ。御恩ハ数々願ひのまゝに。行ふべきとの御誕なり シテ 重家仰せ。承つて 地 重家仰せ。承つて。君をたばかり了承申し。御前を立ちしかば。君も御寝所に。入らせ給へば ノラズ・シテ その時。重家独り言に 地 誠ハ重家を。世に立て給ふとも。義経の情にハ換へまじきものと思へば。よしなや長居ハ無益。直垂烏帽子。かしこに脱ぎ捨て。編笠。取つてうち被き。命助かり陸奥さして。下りけるこそ嬉しけれ

復曲能《鈴木三郎重家》の今後と課題

右のように、復曲された《鈴木三郎重家》はセリフ中心の能である。初演の舞台は鈴木啓吾の力演もあつて、セリフ劇の面白さを示していたが、反面、難しさも感じさせるものとなった。

この能は後場で、捕らわれの身となった重家が、義経を糾弾する頼朝の詰問に対して堂々と主君の正しいことを訴えるところが見所になる。まず、頼朝は臣下の土佐正尊を義経が討ったことを問い詰めるが、重家は義経が平家追討の大功労者なのに会おうとしなかったことと、刺客に名のある一門の武将ではなく土佐正尊という小物を差し向けた不覚を訴えて、頼朝をうならせる。すると、頼朝はさらに摂津渡辺での梶原景時との逆櫓の口論を持ち出して義経の非を説くが、景時が義経を猪武者と畜類にたとえたことを訴えて、これも見事に切り返す。この二段の詰問に対して、堂々と反論しかえって相手を感じさせるところが見所となるのである。

当日のシテはまさに重家になりきって演じたが、前半の正尊の件と後半の逆櫓の弁明が同じテンションで演じられて、単調に見えてしまう嫌いがあった。ここは畳みかけるような迫力が欲しいところである。同じような印象になつては面白さが減じてしまう。つまり、芝居をすることが必要なものであり、固定した能の様式の中でどのように演じるかが今後の問題となろう。

相手となるワキの役割も重要で、権力者としての鷹揚な態度を見せながらも、正尊の段で京童の笑いものになっていると言われて憤ったり、逆櫓の段では自分の不覚を強く指摘され、重家の心持ちに感動してさめざめと泣くところはこの能の肝となる部分で、シテとワキの演技や呼吸が大切なところである。この展開があつてこそ、その後の重家の男舞や、義経を慕つて奥州へ下つていく気持ちが生きてこよう。

《鈴木三郎重家》という能は室町後期には成立しており、それなりに上演されていたことも知られるが、江戸時代に入つて演じられなくなったのは、立ち役の演技がかなり固定化してきたこと、つまり様式化されたために、面白く演じられなくなったことも考えられる。ともあれ、今日の能としては、その約束事の中で演じるしかないので、完成された様式の中でどのようにセリフ劇の面白さを表現していくか、それが今後の課題となろう。《鈴木三郎重家》は令和元年十一月二十四日に矢来能楽堂で行われる「一乃会」で再演されることが決まっている。

注

- (1) 《鈴木》の謡本は室町後期から江戸初期にかけての古本が多く現存する。上掛りでは、東京大学史料編纂所蔵堀池宗活節付本・松井家蔵淵田虎頼等節付一番綴本・鴻山文庫室町末期節付十種本・松井家蔵妙庵玄又手沢五番綴本・観世文庫蔵江戸初期節付各種・法政大学能楽研究所蔵光悦流書体六十番綴本・同所蔵江戸初期十番綴本・東京大学蔵江戸期筆二番綴本などが、下掛りでは、国会図書館蔵島養休右衛門節付一番綴本・法政大学能楽研究所蔵島養道断本混綴五番綴本・鴻山文庫蔵慶安承応了随本・天理図書館蔵江戸初期節付二番綴本などが存する。版本としても元禄二年のいわゆる三百番本に所収される他、各種番外謡本集にも所収される。
- (2) 大方家本「高館」『幸若舞曲研究』第四卷(昭和六十一年、三弥井書店)。
- (3) 『義経記』(日本古典文学全集31、昭和四十六年、小学館)。
- (4) 幸若舞曲の本文の引用は『舞の本』(新日本古典文学大系59、平成六年、岩波書店)による。



頼朝の前へ（五）



母との別れ（二）



ひるまず、滔々と（五）



見送り、泣く母（二）



男舞（九）



頼朝登場（中×後）



奥州へ（十）



捕らえられ、連行（四）

- （5）『義経記の成立―「北国落」について―』（『國學院雜誌』第六十五卷二・三合併号、昭和三十九年二月）。
- （6）『狂言辞典（事項編）』（古川久・小林責・荻原達子編。昭和五十一年、東京堂出版）では
- （7）『土佐浄瑠璃正本集』（昭和五十二年、角川書店）。